

■「動物における救命救急、動物病院との連携」

ホメオパシーセンター湘南平塚

JPHMA 認定ホメオパス No.0876

JPHMA 認定アニマルホメオパス No.A0118

HMA 認定ホメオパス No.1642

ZEN メソッド習得認定 No.0226

JPHF 認定インナーチャイルドセラピスト No.0008

水野 和子 (みずの かずこ)

<クライアント>

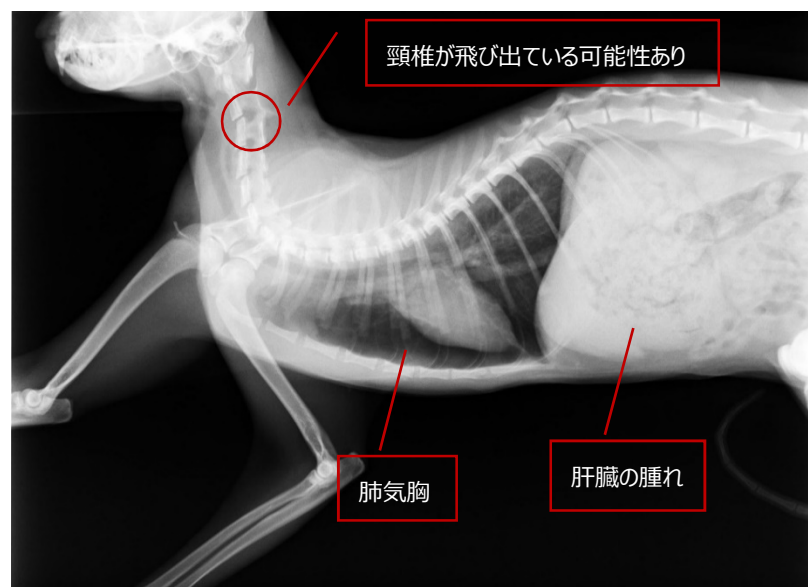
のら猫 メス 推定 10 か月 (歯、骨の柔軟性から獣医師が判断) 未避妊

<状況>

- ・交通事故 右側から走行中の車の前に飛び出る。
- ・痙攣、鼻からの出血、意識なし、呼吸も低下
- ・体温低下を防ぐため、タオルケットで包んだ。
- ・約 30 分後、意識は戻る。眼からの出血あり。歩行は可能。
- ・15 分後、動物病院に行き、レントゲンなどの検査を行う。

<診断>

- ・肝臓の炎症
- ・肺気胸
- ・頸椎の損傷の可能性あり
- ・脳圧による損傷の可能性あり
- ・脳血種の可能性あり
- ・3 日、1 週間が目途



<入院の状況>

- ・肺気胸、呼吸が浅いため、酸素室での経過観察

<病院へのアプローチ>

- ・ホメオパスであることを説明し、レメディーをとらせてもらいたいことを依頼。
担当した獣医師がホメオパシーを知っており、否定的ではなかったことで、了承してもらえた。

<レメディー選択>

獣医師の診断をもとに、緊急性の高いものにフォーカス

φArn（ウサギギク）、φBell-p（ヒナギク）、φCalen（キンセンカ）、φHyper（セイヨウトギリソウ）
Acon.10M（ヨウシュトリカブト）、Arn. 3C（ウサギギク）、Ham. 200C（アメリカマンサク）、
Bell. 200C（セイヨウハシリドコロ）、Led. 200C（野生ローズマリー）

マザーチンキは事故、ケガ、痛みをベースにし、ショックに Acon、血種に Arn と Ham、炎症に Bell、
痛み Led を選択。

スプレーと滴下用に瓶で渡す。

スプレーは酸素室を開けると、滴下は朝夕で依頼。

<当日の様子>



- ・点滴：生理食塩水に脳圧の低下薬を混入。
- ・ぐったりとしている。体温低下を防ぐため、バスタオルをかけている。
- ・動き無し。

<2日目>



- ・点滴のカテーテルを外さないようにエリザベスカラーは付けたままだが、意識もあり、食事もする。
- ・スプレーは初日同様、キャットフードに滴下。
- ・大きな動きはないが、もぞもぞ動く。

<3日目>



- ・動くようになり、給餌はボウルから行えるようになる。
- ・肺気胸も改善し、脳血種もない。
- ・血液検査ではALP（肝臓の炎症数値）は高いが、その他は標準内。
- ・スプレー、滴下変更なし。

<4日目>



- ・飲食はボウルからするようになる。滴下を水に変更。
- ・動きも活発になる。

<5日目>



- ・脳圧を下げる薬はなくなり、肝臓の炎症を下げる薬のみ。
- ・4日目に酸素室から出るが、獣医師（最初の獣医師ではない）を怯え、隔離のため酸素室に戻る。

<7日目>



- ・酸素室にいるが、酸素濃度は外と同じ
- ・右足のカテーテルも気にしていない。
- ・1週間内での急な変化もなく、順調な回復を見せる。

<8日目>



- ・カテーテル、エリザベスカラーも外れ、精神的にも落ち着き、酸素室から通常のクレートに移る。
- ・スプレーは中止、水への滴下のみに変更

<診断>

- ・体調の急激な変化の可能性はない。
- ・1歳未満が幸をそうして、骨への影響が最小限に抑えられたと考えられる。
頸椎についても影響は少ないと思われる。
- ・今日時点で退院可能。

<考察>

救急において、現代医療を行いながら、ホメオパシーを用いることで、改善を早めることができると思われる。救急では現代医療で使用した薬剤の影響は改善後に行うことができるので、クライアントの改善を最優先にすべき。

このケースでも、使用した薬剤を獣医師から知ることに対応した。

<退院後>

- ・入院から2週間で退院
- ・退院後当日、新しい飼い主に譲渡（先住猫3匹あり）
- ・1週間ほど、クレートで生活する。



- ・その後、先住猫と生活。
- ・その後、避妊手術を受ける。手術の前後、レメディーで対応。

カテゴリー：【動物】 【急性症状】